

春や春カツドウヤ

山本嘉次郎

春や春カツドウヤ 定価六百二十円

昭和四十六年五月一五日初版第一刷発行

©著者 山本嘉次郎

装釘者 村上 豊

発行者 深見喜久男

発行所 日芸出版

〒104東京都中央区銀座三の三の一四ABCビル

電話(567)六六一八〇九

印刷所 東光印刷株式会社

春や春カツドウヤ

山本嘉次郎



日芸出版

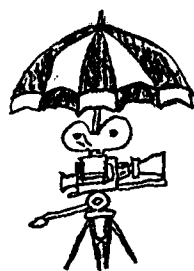
「春や春」の箴言にかえて

映画かて

カットシャシンや

いゝて春

米 関西では活動を
カットウと澄んでいう



目次

第1部 春や春カツドウヤ 9

カツドウヤ借金術 10

口から先に生れた男 20

オペチヨコ亭 30

カツドウ博士第1号 40

フニヤフニヤ・トーチカ 48

居直りオッサン 58

赤城のタコ 69

ポカトク一代 80

アタイはスター 92

シンパリストの死 102

元祖籠の鳥 112

とんだ女 123

最後のカツドウヤ・左卜全 134

第2部 ああ活動大写真 145

ブアイタスコープ 146

タスキ 149

タネトリ奇談 152

ふんどし 162



サイン 166

ハジケ豆 170

乾うどん・泥ぼたもち 172

黒沢 明 175

どですかでん 178

創作ビール 180

衣装室 183

ノゾキ屋 185

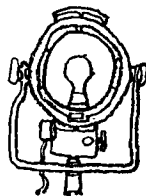
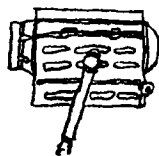
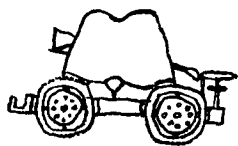
かつら 188

セツト 191

ロケハン 193

ロケーション 196

宣伝 198



ニューフェイス 201

養成所 204

ギヤラ 207

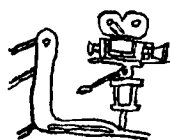
おはよう 209

おつかれさま 212

第3部 泣き笑いの役者 217

あるカッドウヤの年譜 238

あとがき 257



裝釘
村上
豊

第1部

春や春カッドウヤ

カツドウヤ借金術

村田の小デブは、ビュービューと口笛を吹きながら、ステージのなんだ撮影所内の大通りメインストリートを歩いていた。ひどく、ごきげんである。チロッキの胸ポケットに両手の親指を引っかけて、ぐっと大きく反り返った。

「ああ春じゃ春じゃ。春じゃのう……」

これがたった今のいま、所長室の床に額をこすりつけ、大粒の涙をポタポタと垂らして、哀訴泣願、身も世もあらぬばかりに嘆き喚いていた男とは、誰が考えよう。

「シヨ所長ッ！ これ、この通り、頼みます、拝みます。かくなるからは、ただただ、所長を神とも仏とも、命の綱とも頼るばかりでございます」

所長が、古風な言葉に弱いことを、小デブはちゃんと心得ていた。所長は浪花節が大好きである。浪花節の言葉を使えば、ついほだされて、引ッ掛って来ることを計算しているのだ。

鼻クソをほじくりながら聞いていた所長は、指の先でピンと弾ねると、

「え？ なんの話だ？」

と、とぼけた。この人の悪いとぼけぶりに、気の弱い奴はあきらめて引下がってしまったのである。このくらい芸当ができなくては海千山千のカツドウ屋相手の撮影所長なんかつとまるものじゃない。

「ト、トホホホ……」

小デブほどのベテランになると、そんな手には乗らない。それをいいキッカケに、また一泣き泣いて見せた。

「最前もお話し申上げたとおり、かようしかじかの次第で、その金が今日中にできないと、私は女房に殺されてしまうんでございます……トホホホ」

「そうか」

所長は乗って来た。

「お前の女房は、怖いからのウ」

小デブの女房は、梅ヶ谷の娘である。梅ヶ谷といえば常陸山とともに明治から大正へかけて鳴らした横綱だが、その娘なら、もうバクバクの婆さんの筈だから、あるいは孫娘かも知らない。梅ヶ谷は割合に小兵な力士であったが、その娘なる人物は、ヘビー級もいいところである。いう

なればソ連重量挙げ選手のジャボチンスキーをオカマにしたるときである。

小デブも世間ではひとかどのデブで通るが、女房とかけ合せたら、てんで問題にならない。あたかも琵琶湖でゴボウを洗うようなので、小デブと人は呼ぶのである。

このデブチンスカヤ女史、第一、声が馬鹿デカイ。

「マスターッ！」

とスポーツカーの尻^{けつ}みたいにケタタマシイ声で怒鳴られると、小デブはもう体中に震えが来ちゃって、歯がガタガタして物がいえなくなる。そのくせ、デブチンスカヤの目のとどかないところで、飲み打つ買うのかぎりを尽すから、いつもビイビイして借金で首が廻らない。そこで借金を質において借金をするような錬金術を編み出してしまふのである。

「いや、女はみな怖いもんじゃ。お前の女房だけではない」

女房のこととなると、所長はにわかに同情してくれた。

「よし、こんどだけじゃぞ、ええか。女房に気をつけにゃ、いかんぞ。わしもなず、女房にはセンチメダルでのもう」

メロドラマの真髄はセンチメンタルにある、と誰からか吹きこまれたらしい。天下の名言じゃと大いに感服したのはいいが、それからはやたらにセンチメダルが飛び出す。使っているうちに領域がひろがってきて、わしゃ風邪にはセンチメダルじゃ、なんてことになってしまった。風邪

は万病のもとだから、ひどくならぬうちに、大いにビクビクして涙ぐましいまでに用心するにしくはなし……という意味なのである。女房にセンチメダルも、まア大体そういうことである。

デブチンスカヤの話のおかげで、所長は出金伝票に判を押してくれた。まンまと月給の前借ができたわけである。濡れた頬をぬぐい、恭しく伝票を押し頂いて、所長室のドアを出たトタン、小デブは身を反らせてピューピューと口笛を吹いた。

「ああ春じゃ、春じゃ。春じゃのう……」

小デブはその伝票を会計に持って行って、金に換えようとはしなかった。チョッキのポケットに納めて町に出た。

一晚のうちに洋服屋、靴屋、やきとり屋、食堂、弁当屋、喫茶店、バーと借金のあるうちを一軒のこらず小まめにグルグルと廻った。そして一軒ずつに、

「ホラネ」

と所長の判のあるその伝票を見せた。

「会計が閉まっちゃって、今日はだめなんだ。明日払うから、撮影所へおいでよ」

と一枚の伝票を、十枚ぶんくらいに働かせ、それを持って馴染みの賭場へ出かけた。勝ちゃア借金がスッパリ払えるし、負けたら、野となれである。

借金取りというのは、津波のように一時にドッと押し寄せるが、潮どきがすぎると、しばらく

くは不思議に無事平穩な日がつづくことを、長年の経験で知っていた。

一番危険な高潮時を、一枚の伝票でテネクネと相手の目をくらましておいて、あと四、五日姿を消していれば、次の月末まではなんとか繋^{つな}げる。そして月末ともなれば、また新手を編み出して所長に泣きつけばいい。

小デブばかりではない。所長をいかに上手にだまくらかして前借をするかというのが、カッドウ屋の日常闘争であり、かつ趣味と実益を兼ねたスポーツでもあった。

親を殺したり子供を生ましたりなんて陳腐な手では、容易に騙^{だま}せるものじゃない。相手の耳にタコができてゐる。

「タ、タ、大変です、大変です」

靴音高く所長室に駆け込み、まるで殺人現場から駆けつけたみたいに血相を変えて、

「こ、これ願います、判を、判を、早く早く、さアさア」

口をさしさはむ隙を与えず、表面は鷹揚^{おうよう}に見えても実は人一倍周章者^{わてもの}の所長の習性を利用して、おどろいて出金伝票に判を押さしてしまった素迅^{すじん}しい奴もいる。

所長が長々と電話を掛けているところを見計らって、ほかの書類の中に出金伝票を忍び込ませ、面倒くさそうに盲判を押すついでに、うっかりと押さしてしまった手品使いみたいな奴もいる。

「所長さんのおかげで、こんどはじめて字幕^{字幕}の端っこに名前を出させて頂きました。早速田舎へ

帰って年寄った両親に、長年の不孝を詫びたり、出世を喜んでもらったりしようと思います。いえ旅費はなんとか都合いたしましたが、ごらんの通りのボロ服では故郷に錦を飾るわけにはまいりません。おなじことならパリッとしたところを見せて、セガレよ、お前も立派になったと……」

ここで絶句してしまった。しばし無言、切なき思い入れよろしく、というところである。

「うむッ！」

浪花節の好きな所長は、ハッタと膝をたたいて唸った。

「それ以上いわんでも、ようわかっとる。今夜、わしの家へ来い」

これは失敗であった。所長のお古のモーニングと、ついでに墓詣りでもせいと数珠じゆずをもらっただけだった。旅費は都合した、が一言多ひとことかったのである。

こうしたあの手この手を自慢したり、ボヤいたりを肴さかなに一杯やるのがカツドウ屋の生甲斐みたいなものであった。いまでは借金が身についてしまつて、借金なしではかえって生活の調子がとれないようになってしまったが、その原因は会社側にあるのである。

当時は契約書というものがなかった。会社を甲とし相手を乙として契約内容を対等に取り極め、公正証書にしておけば、法的に有効である。一回の出演料をたとえば三十万円とし、一年に四回の出演を会社が保証する。年額百二十万円になるから、それを月割りにして毎月十万円ずつ月給のようにもらう。それを保証金という。ギャランティ・マネーと称するのである。略して